

病気お見舞い行動と日本人の「義理」 ——豊島と奈良市の贈答慣行——

上川 克枝

はじめに

最近（2002年）「豊島」¹⁾に住む85歳の義父の骨折入院で贈られた115件の「病気お見舞い」と、退院後の「快気祝い」の一連の流れを間近に経験した。それは筆者が抱いていた「病気お見舞い」のイメージを覆すものであった。そのイメージは、ヨーロッパの伝承物語「赤ずきんちゃん」（ペロー再話版1697年）から得ている。物語の冒頭に、「隣村のおばあさまの所にお見舞いに行ってらっしゃい。おばあさまがご病気だと聞きましたからね。このケーキとバターの小瓶を届けてあげてちょうだい」とあり、「子供のお使い」としても成り立つような生活に密着したものである。

あらためて暮らしの中の贈答を通観すると実に多くの贈答がある。子供の成長や長寿を祝う贈答のほか、結婚や葬儀に関わる贈答、中元歳暮といった今や季節恒例の贈答など、そのほとんどに「熨斗をかけた贈り物」、あるいはそのお返しとしての「熨斗をかけた内祝いの品」が贈り・贈られる。そこには守らなければならない作法・儀礼が伝えられている。われわれはその都度「何時、なにを、どの位」と、親や親戚に問うたり、儀礼作法の指南書に目を通して、それらを行っている。そこには、自身の行動規範ではでき得ない「何か」の存在を暗黙裡に認められる。先に記した豊島の「病気お見舞い」では、義母がお見舞いを受け取る度に「あァー、また借金がふえた」と嘆いていたのが耳に残っている。「お見舞い」を「借金一返すべきもの」との前提にたって受け取っている義母を前にして、筆者は大きな疑問をもったものである。義母は「貰ったものに、返さないと義理が悪い」と言い、その近隣の者は「借金してでもお返しをしなければ、面子がたたん」という。

暮らしの中で何気なく行われてきた種々の贈りものの慣習は、深く日本の文化・社会に根ざした「義理」にかかわる事柄なのか。残念ながら筆者の「義理」への認識は「なんとなく、そんなもの」の域である。「子供のお使い」という日常性を内在させる「病気お見舞い」が、それを受け取った者に「嘆き」を起こさせるのが「義理」とするなら、その行動になぜ、どうして「義理」がかかわってくるのか。筆者は、「病気になる」という非日常的な「病気お見舞い」にかかわる人々の様子と、前記の「嘆き」のありかを明らかにしたいと思うにいたった。本稿は、「病気お見舞いをしますか」の問いに98%の人々が「病気お見舞いをする」²⁾と答えるような一般的な「病気お見舞い行動」を、日本の贈答慣行と関連させながら追究する。また、筆者がかかわった「病気お見舞い」が「豊島」の事例であり、「豊島」は離島という特徴のある地域であるので、その「病気お見舞い行動」には地域性があるのではないかと考えられる。これらの課題の追究方法として、「義理」の理論

的考察とともに筆者の住む奈良市とその近郊の地域（以後その両地域を含めて奈良市と表記）を比較対照地域として取り上げ、両地域の贈答の実態調査をおこなった。そこで得られたデータをもとに「病気お見舞い行動」、および贈答行動様態の比較分析をする。

1 「病気お見舞い行動」の分析枠組「義理」

「病気お見舞い」は、単に誰かに物をあげる行為ではなく、日本では「病気お見舞い」として「水引」³⁾をつけた品を贈り、それに対して「快気内祝い—お返し」を一对にした贈答行動であり、相互授受の「かたち」として慣習化している（以後、慣習化された贈答を贈答慣行と呼ぶ）。贈答慣行の返しとしての「内祝い」の形態は、江戸時代すでに今と変わらずに行われていることは古文書の日記(川合小梅、幕末～明治)⁴⁾などに認められ、極めて日本的な贈答慣行の一形態と考えられる。

日本の贈答の先行研究における諸知見によれば「贈与」に対する「お返し」が断ち難い関係にあると言われている。井下理は、新婚旅行のおみやげの契機として「義理」を指摘している（井下理 1979）。それは、われわれの日常経験からも知るところである。

贈答の先行研究者でもあるM・モースは、「贈与」に対する「返礼」は「貰う富によって授かる名誉・威信の要素に対し返礼しなければ自らの権威を失うべきものとして、贈り物への返礼は絶対的義務とされる」とする（モース 1950 : 233）。日本の義理の論理にこれらのモースの論を対応させてみる。「義理」の論理では、贈り物をくれた相手に対して「義理を立てる」あるいは「義理を欠く」の用語があるように、「返さなければならない」と位置づけられている。このように、当事者間で「お返し」をすることで相手へ「義理」を立てるような関係は、モースの「返礼の義務」に対応していると考えられる。モースはまた「相互に義務を負い、交換し、契約するのは個人ではなくて集団である」としている（モース 1950 : 226）。それは、義理の論理にかかわる「家のつきあい」に対応する。モースの論は、日本の義理の論理を示唆的に示していると考えられる。本稿は、日本的コンテクストである「義理」の論理を援用して「贈与と返礼」の「病気お見舞い行動」の解析を試みるものである。

1.1 日本の義理の生成

暮らしの中に根付いている「もらうものに、お返しをしないと義理が悪い」との人々の贈答意識は、日本の文化・社会的な「義理」の意識に関連する。この贈答意識は、「病気お見舞い」の「お返し」行為に諸々の意味を付随させる。本稿は、そのような「日本の義理」がいかに生成し、存続してきたか、図1のような仮説的説明を構成する。

日本の贈答慣行の背景は日本の稲作の作業構造にある。稲作は主に集落単位で行われる構造をもつ。その作業は互いの提供できる資源（ものに限らず、労力、知恵など）を、共

同作業を通して融通し合い、金銭に換算できないかわりの中で行われる。たとえば、主が病気で田植えが出来ないと近隣の者が寄って作業を完了させる。それは、「田」が維持できないことで、村落全体としての稲作に影響を及ぼすことにもなりかねない事態を避ける意味をも持つ。したがって親戚に限らず近隣の者は、提供した労務への報酬を当然の様には期待しない。しかし「家の主」は生活の危機を免れることになり、提供された労務に対して、何時か何らかの機会に報いたい（報いる心情）と思うだろう。ただ日常生活の中で行われる「贈与と返礼」は、「贈与」に対して直ぐに返されるのではない。「返礼」は、贈られたことを意識する当事者自らが「お返し」する機会が訪れたと思ったときに行われるため、ある特定の贈与に対する、あるいは特定の相手に対する「お返し」と限定されるものではない。このように特定化されない「お返し」意識は、「特定化されない義務」として人々のこころの内

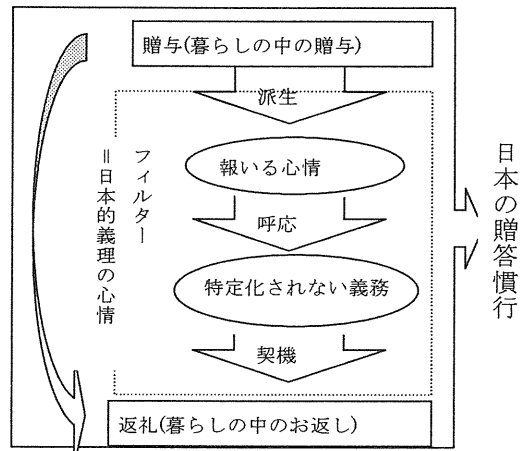


図1 義理と贈答の構図

に醸成される。「特定化されない義務」は、当事者間の互いの義理の関係に転換され、「お返し」あるいは次の「贈与」のきっかけになり、贈り・返される「贈答の環」がつくられる。「贈答の環」は繰り返され、贈答慣行として人々の暮らしに根づいていく。

人々の暮らしの中の贈与に対する「何時かこのお返しを」と考える「日本の義理の心情」は、「贈与」から「返礼」に至るころの道筋にかかるフィルター役割を果たしていると考えられる。「暮らしの中の贈与とお返し」の構図を通して日本の義理は、人々の間で了解されていくことになると考えられる。源了圓は「農村にみられる義理の原初的形態は、義理的事実として古代社会からあり、義理という社会的事実を自ら生きながらそれを義理とは自覚していなかった」としている（源了圓 1969: 60）。このような農村の暮らしの様態は、アジアの稲作地帯にも共通に見られると考えられ、加藤秀俊（2003）の論を以下に引用する。

中国・インドネシア・韓国・マレーシア・タイ・フィリピンにも「家」をもとにした関係性が重んじられ、地域社会は「水の灌漑制度」のあり方を反映した組織であり、その生活は小規模な階層性や共同体的な社会組織を必要とした。… 幾つかのアジアの農村社会では、金銭の授受を伴わない相互扶助的な習慣が残っている。共同体の仲間たちは貨幣のやりとり抜きで、たがいの協力をおしまずに助け合う。

（加藤秀俊 2003：17-18）

このように、稲作作業には共同体的あるいは階層的な側面が普遍的にあり、その作業構造は人々の暮らしを規定していると考えられる。「義理」の先行研究者である川島武宜は「義理の生じる関係性は、ほとんど全ての関係が共同体的・階層的であることから、そのような社会を構成するところでは、義理はどこにでもみられる」としている（川島武宜 1951）。しかし、「義理」がどのようなかたちで暮らしに根付いているかは、その国の特性との関連によって一概には言えないと考えられる。本稿では日本社会の稲作作業構造に限定して、日本の義理をフィルターとしてそこから派生する日本の贈答慣行の構図を仮説的に構成している。

1.2 義理と贈答

前節で示唆した農村の「贈与と返礼」の様態は、農村社会特有のことではない。それは、室町時代の武士社会にも見られる。たとえば、当時の文献『伊勢定親教訓』に「他家より人の物くれたらんには、相当の贈るほどの返しをすべき也」とある（源 1969:43）。習俗として暮らしに定着していたこれらの様態が、どのようにして「義理」として日本の社会で語られることになったのか。

観念としての「義理」が用語として使われたのは儒教の一派である朱子学が、江戸幕府によって武士階層に採用されたことに関連する。朱子学の正統的用法では、『義理』は武士社会において人の履むべき道（源 1969:49）として用いられた。たとえば『東照宮御遺訓』には「武道は命を的にかけ、義理を勤めることを第一とする」とある（源 1969:49）。この時点では「義理」は一方的であり、「お返し」の観念は「義理」に付随していなかった。この儒教的義理の用法は、短期間のうちに本来の意を失い日本の習俗と融合して新しい意味を獲得し、「日本化された義理」となった以下のプロセスが考えられる。

義理の「原初的形態」は前述のような農村における習俗としてであったが、人々に観念として自覚されたのは、江戸時代の伊原西鶴の『武家義理物語』（源 1969:49）によってであった。その後江戸の俗文学者や講談師等によって、歌舞伎や人形浄瑠璃の演目などで武士の義理に世俗の情を付与され「演出された義理」として演じられ、人々の暮らしのなかで「義理」が「語られる」ことになる。近世封建社会において、農村の習俗と演出され観念化された「義理」が出会い、広く人々に了解されることとなったのがその仮説的プロセスである。このプロセスのなかで、「義理」は「返されるもの」となり、贈答の慣習は義理に意味づけられ日常化したと考えられる。

1.3 贈答を規定する「義理」の持続と変容

本項は、川島武宜の義理の理論と義理を生ずる6つの関係内容に依拠し、論をすすめる。戦前まで絶対的モラルとして生活を規定していた「義理」は、戦後社会の民主化と身分階層性の希薄化によって変容・融解をよぎなくされる。しかし「義理」のもつ人的・情緒的結合などの特性ゆえに、現代においてなお「義理」が人々の意識下に変容しながらも温

存され・持続されて、日々の贈答行動を規定していることを追究する。

川島は「義理は社会秩序としてその関係性において独自の様態を持ち、道德教育として深く国民に絶対的モラルとして染み込んでいて、社会の権力構造や法則や社会秩序は義理によって構成され支えられる。」とする。また「義理を生じる関係とは、特定の他人との間に一定の共同体的関係を維持・強化するに必要な行為の履行を要求している」としている。そして「義理を生ずるところの関係内容」を6つ指摘する。①継続性、②生活関係の包括性、③個人の支配領域の弱いこと、あるいは欠けていること、④「人的」(personal)な結合、⑤情緒的な結合であること、⑥身分階層社会的性質、である(川島 1951 : 24-26)。

贈答行動にこれら義理の関係性を意味づけると、以下のことが考えられる。①個々人に限らず「家」や「会社」などで相互に交わされる贈答行動は、将来にわたって社会的結合関係を期待する「継続性」に意味づけられ、互いの関係を強化する手段となる。「病氣お見舞い」もこの範疇になると考えられる。②「生活関係の包括性」(その人の全生活を結合関係に入れてしまう)は、親方と職人の関係や、家元制度などにみられるというが、それらの関係は今もいろいろな師弟関係や日本型経営をとる会社組織に存続しており多くの贈答を派生させる。③贈答品の熨斗紙に書かれる「上書き」に「家」の名が書かれることは、「個人の支配領域の弱いこと、あるいは欠けていること」に対応する。④の人的な結合は特定の具体的個人の中に成り立つ結合関係であり、⑤情緒的な結合は単なる利害の計算や判断によって維持される関係ではないことを意味し、特定の他者との間で贈答が繰り返される意味づけとなる。⑥身分階層的社会性質は、暮らしのなかの贈答に見られる当事者の間の上下意識に関わっていると考えられる。封建社会において生活を規定してきたこれらの義理の関係性は、その後の戦後の暮らしの中で起こった民主化によって変容を余儀なくされる。人々の暮らしは、まず農村社会の地主・小作の関係の強制的解体に始まり、あらゆる日本社会の封建制度的諸制度の変化の影響を受ける。戦後日本の「一億総中流化」現象は川島の言う「身分階層社会的性質」の希薄化を意味する。しかし「義理」の基本形態は、川島が示唆するように「人々の人的・情緒的結合関係」によって生起する心情であるため、外的環境の変化を受けにくく意識下に温存されていると考えられる。川島の論じるこれらの「義理の関係性」は、今も長幼の序、性差、社会的役割規範意識、地位階層性などにみられる上下意識のベースとなっている。

現代社会の民主化への変容は、「義理を絶対的規範」とする道德観念の融解をまねいている。その結果、現代社会に暮らす人々は、「贈与」に対する「お返し」を考えると、その相手との関係をどのように判断するかは難しく、煩わしく感ずることになった。人々は、心情的には意識下に温存された「義理」に拘束されながら、現代社会への変容のもとで生活するなかで、さまざまなもののやり取りをしてきた。そのような暮らしのなかで、人々の意識下に温存された「義理」も以前のままであるわけではない。「お世話になっている」という互いの上下の関係性の確認でもあったこれまでの義理の関係性での贈答行動は、「お世話をかけたから」あるいは「お世話になるから」というように、互酬性や均衡が高まるよ

うに変容すると考えられる。人々の贈答にみられる義理の関係性は、貨幣価値に換算されてプラス・マイナスに置き換えられることになる。このように変容する「贈答と義理の関係」を、以下の2章、3章で「病氣お見舞い行動」の実態を追究しつつ明らかにする。

2 「病氣お見舞い」と「快氣内祝い」

「病氣お見舞い」には、義理が生ずる関係性のひとつである「継続性」が内包されているのは先に記述した。そして「病氣お見舞い＝贈与」にたいして、時間差をおいてされる「快氣内祝い＝お返し」は、「義理を返す」となることも明らかである。「病氣お見舞いのお返し」には、「奈良は半返し」「豊島は7割返し」等とその地域なりの「お返し」の内容が語られている。「病氣お見舞い行動」は地域によって違いがあると考えられるので、上記のような「お返し」言説をもとに、贈られる品とお返しは等価ではないということに着目する。なぜ等価ではないのか。その「差異」をもたらすのは、当事者間の「義理」の関係性である。その「差異」はつぎの「病氣お見舞い」の契機となり、ときには世代間機会返済となって互いの「家」や個々人のつきあいは「末永く継続」されていくと考えられる。

「お返し」の扱いは地域や個々人によって、あるいは団体や組織によっても違う。たとえば、公職選挙法では「病氣お見舞い」は贈収賄として禁止の対象になり、賄賂的側面をみせる。逆に会社や各種団体などでは、「病氣お見舞い」を構成員の福利厚生対象として約款や規約で規定し「団体名」で用意したりする。あるいは社員やグループ間でも「お見舞いの取りまとめ」をすることはよくある。しかし、「お返し」は個々人宛に郵送される慣行がある。これは、贈られる側に贈ってくれた各人を特定でき、お返しを郵送するための住所などの情報を知る関係性が担保されていることを意味する。したがって病氣お見舞いをする、あるいはしてくれる相手との間で、それまでに何らかの交換関係があると推察できる。本稿でおこなった病氣お見舞いの個別事例のインタビュー調査では、見舞い客の85%に年賀状の交換が回答されていた⁵⁾。

日本の贈答慣行については「病氣お見舞い」に限らず、明治時代から虚礼廃止の国民運動が断続的に起こっていたが、なかなか定着しない。贈答の関係において「病氣お見舞い」や「快氣祝い・内祝い」の受け取り拒否は至難である。それは義理の関係を断り、相手の「面子をよごす」ことにもなる。そして「快氣祝い」をする側は、従来の「義理を返す」の意味に加えて、「気持ちに区切りをつける」の意味もあり、それを断られることはつらいことなのである。筆者の調査対象者の1人は回答の中で夫が病氣入院時のお返しの気持ちを下記のように記している。

お返しをすることで、自分と夫の気持ちのけじめとなるような気がします。健康な人と同じになりたいという気持ちの表れかもしれません。10割返すことで、先方のお

気持ちを無にってしまうのは失礼との思いがありました。

(2003. 奈良市, 女性, 62 歳)

「病気お見舞いのお返し」の廃止に成功した例もある。1997 年秋田県田沢湖町荒町壮年クラブが「病気お見舞いのお返し」の廃止運動を起こし、それを徹底することができた⁹⁾。成功した要因のひとつとして、「病気お見舞いのお返し」に趣旨を限り、「お見舞いの額」を規定し、「お返しの品」に代わる「お礼状」を別途用意したことから、お返し廃止の趣旨が住民に受け入れ易かったことが推察できる。

しかし、「お返し廃止」運動が起きた豊島では、現在、混乱した状況に陥っている。豊島に「虚礼廃止」の動きがもたらされたきっかけは、昭和 50 年代に主婦連や地域女性たちが主になって進めた新生活運動である。豊島婦人会の母体である土庄町婦人会が、「お返し廃止」を申し合わせ下部組織におろした。下部組織にあたる豊島婦人会の会長がそのことを島の自治会長に伝え、「女子（おなご）が、そんな勝手なことを決めたって、そのまま受け入れられん」としながらも、自治会に諮り「お返し廃止」を申し合わせとした。しかし豊島の 3 地区の人々の間で受け入れの温度差がみられ、趣旨は徹底されていない。その理由は「お返し廃止」を冠婚葬祭の全てに適用させたこと、もう一つは豊島が自治会役員を「長老」と呼ぶような自治会組織をもち、上部・下部の位置づけのはっきりした階層性を維持している地域社会であり、「お返し廃止」の発案者が下部組織に位置する婦人会であったことも一因と推察できる。筆者の調査対象者の 1 人は、「お返し廃止」のエピソードを下記のように語っている。

昭和 50 年に夫が病気入院しお見舞を頂いたが、お返しを廃する申し合わせがあるので困りました。かわりに学校へ図書を寄贈しようと申し入れたら、「前例がないから」と断られました。昭和 52 年に夫が亡くなって葬儀をしたのですが、「香典返し」をしないことで親族から非難されました。「それでは」と持ち帰り用に「お料理」を用意しましたが、婦人会から横槍が入ることになりました。結局、夜分に裏の畑に大穴を掘って「お料理」を埋めました。

(2003. 豊島, 女性, 68 歳)

現在でもその混乱は続き、「お返しする・しない」と人によって違う。「しない」人でも「島外の人には“お返し”をする」。「する」人でも“お返し”をするが形式通りにはしない（熨斗をかけない）あるいは「しきたりだから常のようにする」と分かれる。筆者の行った「病気お見舞い」の調査でも、「お返し」を一部の人は「申し合わせがあるから受け取れない」と回答している。

このような虚礼廃止の国民運動が歴史的に繰り返されてきながら、しかし「贈与」と「返礼」の日本の贈答慣行が連綿として続いている。「絶対的規範としての義理」に長く生活を

規定されてきた日本では、戦後社会の急激な変容があったにしても、日々暮らしている人々の「お返し」の贈答意識の変容までには未だいたっていないと推察される。

3 豊島と奈良市の「病気お見舞い行動」の実態

日常生活での贈答の実態を把握し、非日常的な「病気お見舞い」がどの様に行われているか。その行動に日本の「義理」がいかに機能しているのかを分析するための実態調査を行った。豊島と奈良市の既婚女性各 13 名を対象者とした 6 ヶ月間の日々の「もののやりとり」の実態記録であり、贈答の日付・品・相手・種類・契機に分けて回答依頼した。調査対象者を既婚女性としたのは、井下（1979）も記しているが、多くの人々は結婚を機会に仲人や互いの親族・職業の関係者などとの贈答にかかわってくると考えられることによる。調査期間は 2003 年 9 月～2004 年 3 月である。26 名の対象者の抽出は雪だるま式抽出法に倣った。調査対象者の平均年齢は、奈良市 56.8 歳、豊島 61.9 歳である。世帯収入源は、奈良市対象者が給与収入 77%、公的年金 23%、豊島対象者が給与収入 23%、公的年金 61.6%、商業・漁業各 7.7%である。

3.1 豊島と奈良市の「病気お見舞い行動」の比較

日々のもののやり取りの中から分類した「病気お見舞い行動」は、奈良市 69.2%・豊島 76.9%の調査対象者がおこなっていて、6 ヶ月間で平均 73%の調査対象者が病気お見舞いをしたことになる。2000 年博報堂生活意識調査での「この半年間にしたお見舞いは？」の質問に対する回答で得られた「病気お見舞いと答えた人・阪神圏 42.8%・首都圏 35.6%」の結果と比べるとかなり高い比率である。

表 1 は、回答データを集計分類したものである。日常の贈答回数に比例して病気お見舞

表 1 一般贈答と病気お見舞いの関係

(単位:回数)

期間03/9～04/3 6ヶ月間	一般贈答	病気お見舞い を贈った	快気祝いを受け た
豊島 13人	2433回 (受1083, 授1350)	39回 (10 /13人)	3回 (不明36)
奈良市13人	1151回 (受540, 授611)	13回 (9/13人)	10回

い行動の回数が多くなる関係が認められる。快気祝いの豊島の項の（不明）は、先に記述した「お返しをしない」申し合わせがあるので、水引

をかけた正式な「快気内祝い」の体裁をとらない贈答が記録されているためである。日常のもののやり取りを「一般贈答」として、その中から病気お見舞いを分類している。両地域を比較すると、一般贈答回数が 2 倍の差があるのに、病気お見舞いの差は 3 倍となっており、その差はひろがっている。これらから、豊島の人々は奈良の人々より多く病気お見

舞いをするといえる。

図2は、回答データから病気お見舞いの相手を分析している。豊島では地域性の強い近隣、一族意識につながる親族といった義理の関係性のある相手が分析されている。奈良市

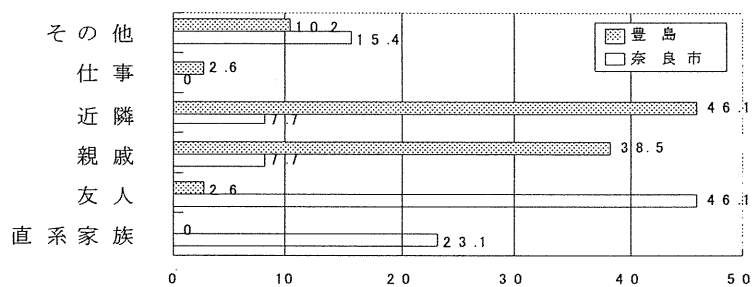


図2 病気お見舞いの相手 単位 %

では友人・家族が多くなっている。ここでは両地域の違いが顕著になる。特に奈良市の友人という「親しい知人」がお見舞い相手として多くあり、地縁といった地域性のつよい関係性より、新たに結ばれる知縁といった関

係性での関わりがみてとれる。

図3は、回答データの贈答契機を分析し、3つの「病気お見舞い行動」の契機、「しきたり」、「おつきあい」、「はげまし」を抽出した。「おつきあい」と「しきたり」の2つは、どちらも義理の関係性である「継続性」があるが、関係内容の違いが指摘できる。「おつきあい」

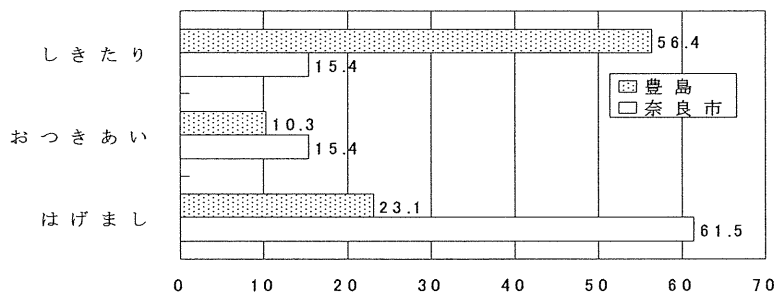


図3 病気お見舞いの契機・地域比較

は、相手として個々人あるいはその集合体の間での関係性に見られる。「しきたり」は、たとえばその土地の風習・伝統、家柄、宗教に準拠する意味合いがつよいと考えられる。「しきたり」と言う地域社会の伝統に倣うこと

を行動契機としておこなう「病気お見舞い」に、日本の「病気お見舞い行動」の特質があると考えられる。病気お見舞いの契機では、両地域の差異が明確に認められる。奈良市では、「病気お見舞い」は手段としてよりも、「はげまし」という情愛の関係で行われていると考えられる。その相手として「直系家族や友人」(図2参照)が多く挙げられていることにも関連する。豊島の「しきたり」意識が強いのは、2つの要因が考えられる。1つは離島という地理的要因であり、2つめは豊島の地域社会が「地域の伝統・文化を守っている社会」として維持されていて、そのことが豊島の「病気お見舞い」の多さを押し上げていると考えられる。「病気お見舞い」が多い豊島の地域社会には、いくつかの「しかけ」がある。豊島の贈答実態調査とともに聞き取った地域の様子の中に、「しまじゅうと」の存在、うわさの中継点の「店や」の存在、「おせったい」(弘法大師信仰)など豊島ならではの文化・社会的な特徴が明らかになっているが、本稿ではその存在を指摘するだけにとどめたい。

3.2 日常のもののやりとりと「病気お見舞い行動」

前節で病気お見舞いの相手や契機について述べてきたが、本節では、病気お見舞い行動の特徴を捉えるために、日常のもののやり取りと「病気お見舞いの行動」の比較をおこなった。実態調査の回答票は6ヶ月の期間の被調査者による実態記録であり、豊島2433回、奈良市1151回のもののやり取りごとに、日時、品、その相手、贈答種類、贈答契機の5項目にそって記入してある。この5項目のうちの相手・種類・契機の3項目に注目しつつ、前述した「義理の関係」の構成要素についての川島の議論(「継続性」・「生活関係の包括性」・「人的・情緒的結合」・「身分階層的性質(村落共同体、家族共同体、先輩後輩・朋輩・仲間相互の関係、祭事団体など)」)を「当事者の贈答期待」としてとらえ返したうえで、贈答行動の様態としてカテゴリー化をおこなった。その結果①「主として表出」—当事者間に情愛の関係が認められる(以後表出と表記)、②「主として義理」—贈り手とその相手の間に介在する義理の関係性がある(以後義理と表記)、③表出/義理の区別が難しい関係を持つ両義的行動様態を「表出/義理」(以後両義性と表記)の3つの行動様態のカテゴリーをえた。図4はそのプロセスを表したものである。

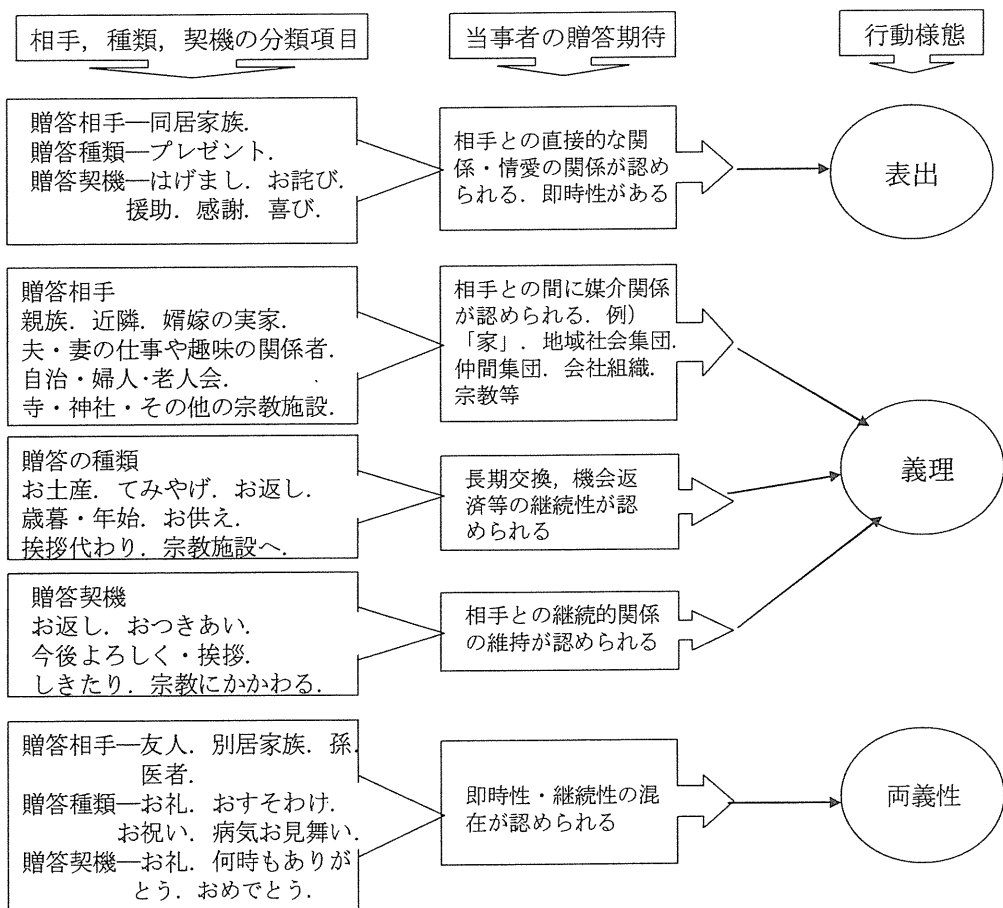


図4 贈答行動様態のカテゴリー化のプロセス

図5・図6は回答票のデータをもとに、「表出」「義理」「両義性」の3つの行動様態を地域別に分類し、一般贈答と、「病気お見舞い行動」との差異をあらわしたものである。

図6には図5の平均値を「一般平均」として挿入してある。

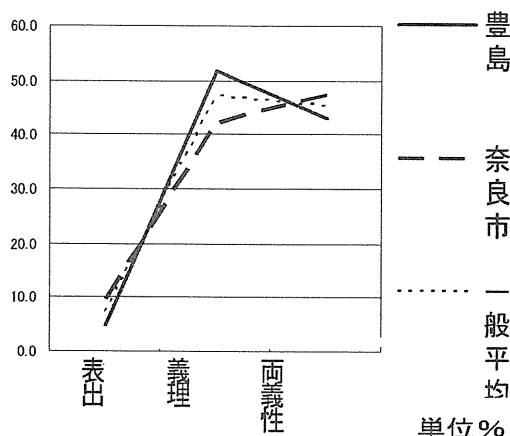


図5 一般贈答行動様態

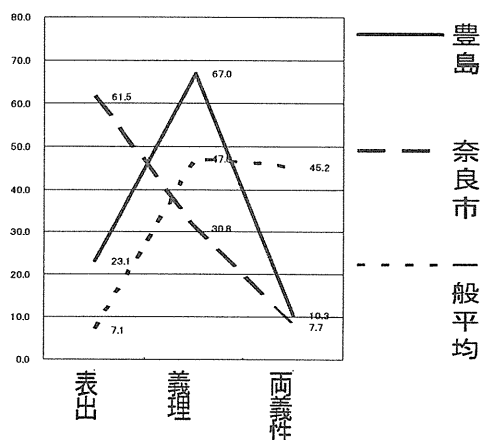


図6 病気お見舞い行動様態

図5は、日常のもののやり取りは両地域の差異は認められるが、パターンにそれほど違いはない。しかし、一般贈答の両義性が多いのに対して、図6では豊島・奈良市ともに最小となっており、「病気お見舞い」が特定の意図を含んだ行動であると考えられる。豊島は一般贈答のパターン(義理をトップとする山型)との類似があるが、奈良市の病気お見舞いは、表出をトップとして直線的に右下がりパターンを示し、一般贈答の右上がりとは大きく違っている。このことから、豊島では日常のもののやり取りの延長線上での「病気お見舞い」が考えられる。しかし、奈良市でおこなわれている「病気お見舞い」には、特別な贈答という位置づけがあるのではないかと考えられる。これらの差異があるにしても、両地域に暮らす人々は「病気お見舞い」をするとき、それを義理するのか、はげましの感情をするのか、明確に意識していると考えられる。

3.3 病気お見舞いで交換されるもの

図7は回答票から抽出したお見舞いの品である。豊島のお見舞金のみが突出しているのは、離島という地理的・社会的要因が考えられる。豊島が高齢化率42%、主たる収入が公

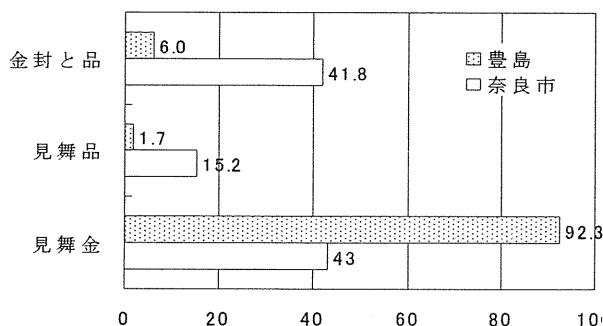


図7 お見舞いの品

的年金といわれる地域社会であり、「病気お見舞い金」は生活支援として実質的な「金封」が便利である。お返しには、ビール券やおコメ券（農協発行）などの金券が使われている。両地域とも「金封」は、「義理」にかかわる相手との間で100%使われている。お見舞金の平均は豊島7500円、奈良市6500円となっている。

しかし、奈良市の金封に添えられる見舞いの品を考慮すると、奈良市は豊島より総額で同じか若干多くなると考えられる。

また、奈良市では、お見舞いの品が 56.8%使われている。それぞれ相手の好みや、気持ちを和らげるような品が個別に選ばれるなど、病気お見舞いの多様な姿が回答票から推察できる。しかしお返しの「快気祝い」の品は、「洗剤」が 85%使われ、背後には「災いを洗い流す」との意味があると云われている。お見舞いの品選びにみられた「個別化」は影を潜める。このような「お返し」の品に対する言い伝えは、現在の豊島ではみられない。

現代社会では「家への病気お見舞いは、はばかられる」ことを理由に、「病気お見舞い」は全て病院でおこなわれる。見舞品は無印の結び切り水引が印刷された熨斗紙（従来の奉書紙のかわり）がかけられ、見舞金は「金封」に入れられる。上書きは家の名が書かれる。

「お見舞い品」など贈り物に奉書紙をかけるのは平安時代の朝廷への贈り物にかけられたことから発していると「水引」をつくる業者組合があきらかにしており、筆者はそれに依拠している。そして、それは穢れのない浄められた品であるとの意味をもつとされている。このお見舞いの「かたち」は、江戸時代まで遡ることができる⁷⁾。

今もなお、日本の贈答慣行に「義理」をみることができていることを検証してきたが、それは戦前のままの「義理」ではなく、戦後の家族や社会の変化を受けて変わり、現代の人と人の関係性を反映したものである。戦前のような「命令され、おしつけられる道徳としての社会規範」が融解した現代社会では、人と人との関係性である「義理」を、どのように贈答行動に反映するかは個人に負うところとなる。贈答をするとき、行動規範を何に求めるかが問題になる。筆者は、身の丈にあった「病気お見舞い」として懐具合にあったお見舞金を包みたいと思うが、現実はいかならない。なぜなら「贈与」も返礼としての「お返し」も「義理」を加味した行為として行われるから、義理の履行を貨幣に換算しなければならない。従来の身分階層性にかかわる上下意識のつよい「義理」の関係性は社会的役割規範に置き換わり、自身がお見舞い相手に対してどれだけの義理をもっているのか、その判断は難しく、「前例」に倣うことでなんとか事態をおさめようとするのが実態である。その「病気お見舞い」が機会返済（同じ機会に同じ行為で返す。返す相手が代わることもある）にあたるなら、以前に貰ったお見舞金額を超えるお見舞金は当然避けなければならないが、物価変動なども考慮しなければならず一概に決められない。また、お見舞い返し（快気内祝い）は義理を繋ぐためには等価ではなく、若干の差をつけなければならない。それは当事者の互いの関係性だけではなく、先にも指摘した地域性も考慮しなければならない。これらの事情によって、貧富の差はあれ身分階層的には水平の関係にある現代の人々は「病気お見舞い」や「快気祝い」をするおりに、日常では意識下にある「義理」の関係性をどのように判断するか悩み、「前例」さがしに首を左右に回すことになる。

「前例」は「世間の相場」と言い換えられる。「病気お見舞い」の派生する範囲は限定的であり、その範囲は「世間の範囲」となり、そこには行為規範としての「世間体」がたち現れてくる。井上忠司は世間に生きる人々を次のように描いている。「世間の基準から自

ら逸脱しないように、世間と自分とのズレを絶えず微調整しながら世間並みに、世間の目（まなざし）にとらわれる状況のなかで、自己規制を働かせながら、他者の期待に同調していく過程のなかで生きてきた」と（井上 1977）。この井上の指摘に依拠して、本稿の病気お見舞い行動を考えてみる。「自己の期待」と「他者の期待」の「ズレ」の調節として働いたのが、病気お見舞いの契機として抽出された義理の関係である「しきたり」「おつきあい」ととらえられる。この義理に付随する互酬性・均衡のアンバランスを補い、集団としての結合を維持させて、「世間」や「自己」を納得させてきたのが「世間体」と考えられる。贈答慣行と贈答の範囲としての世間、行動規範としての世間体については、ここでは示唆するだけにとどめる。

4 「病気お見舞い行動」と現代の義理

戦前の日本社会では、「報いる心情」としての「義理」が贈答行動を規定していたことを論じた。そして現代でも贈答行動の様態として、未だ人々は「義理」に拘束されている実態も明らかになった。筆者は、その「義理」は身分階層性の薄れた現代社会の変容のもとで、新たな「現代の義理」の様態へと変容していると考える。

川島は友人や近隣の関係を親族や姻族等と区別せずに義理の関係性とするが、都市化・個人化の進んだ現代社会の贈答行動では、もののやり取りをするような親しい友人や活動仲間といった関係では、「おつきあい」という言葉で表される当事者間の水平な関係性が見られる。従来の上下意識のつよい義理ならば、たとえば先輩・後輩の関係があるなら当然その関係を優先させなければならない。だが「現代の義理」は、「水平な関係」が付与されることで「親しい友人」関係が前面にでてくる。たとえば友人として「病気お見舞い」をするなら、先輩も後輩も同じお見舞い金額を「金封」に包んでもよいことになる。

従来、義理の関係様態では「贈与」に対する「返礼」は、時間差が要素としてあった。現代の「おつきあい」の場では、「お返し」は伝統に縛られることなく適時になされ、贈答行動の相互性はより明確になる。退院して1ヶ月の期間の後に返される「快気祝い」が、退院すると直ぐ送られもする。近年「病気お見舞いの金封の受け取りを、ご遠慮申し上げます」という事態がみられるようになったのは、世代間にわたっての「義理のお返し——関係の継続」が不可能と考えての行動と解される。特に別所帯で暮らす子供に引き取られた老親の入院の場面で、応対する子供から申し出されるのは筆者も経験するところである。

結語

日本の「病気お見舞い行動」の追究から、それには3つの要素があると考えられる。

①「お見舞いの品」と「快気祝い＝お返し」の授受の行為の相互性。

②授受の行為には、非等価・時間差が設定される。

③授受の品は、奉書紙が掛けられ結び切りの水引が結ばれ、上書きは「家」の名を書く。

実態調査データから病氣お見舞い行動の契機として抽出された3つ「はげまし、おつきあい、しきたり」は、今後それらが占める割合の変化は想定されるが、契機そのものの変容については注目する必要があると考えられる。

豊島の「病氣お見舞い行動」は、離島という地理的要因も加わって、「義理」の関係性である地縁・血縁の絆に強く規定されており、地域社会や親族との関係性の継続など「義理の行動様態」に連関し、回数は奈良市の3倍も多く行なわれていた。

奈良市の日常的なもののやり取りは「表出と義理」を混在させた贈答行動が多かったが、「病氣お見舞い行動」は、相手への「はげまし」という表出的な契機を含んだ「病氣お見舞い」が多く、また相手によってお見舞い品が変わるなど個別化が図られていた。

本調査の対象者である26名は調査期間の6ヶ月間に、実に多くのモノを日常的に交換していた。それらのデータから、現代社会の中で「病氣お見舞い行動」における「義理と贈答」の絡みが浮き彫りになった。モースがみた「贈与と返礼」の社会は、将来にわたっての自らの階層性・共同性を維持し機能させる交換を基礎としていた。それは、日本の戦前までの義理の社会にも対応するものであったが、今、われわれの社会の変容とともに「義理」の変容があきらかになり、「贈与と返礼」の日本の贈答慣行は変容を余儀なくされる。

ここで得られた知見は、豊島と奈良市という特定の地域社会の、特定の人々に関する限定された調査データに基づくものであり、その知見は、日本人の「病氣お見舞い行動」に関する探索的なものにすぎない。しかし、明らかにできた「病氣お見舞い行動」の実態は、「義理」が生活のすべてを規定していた社会の変容から、新たな贈答行動の探究の手がかりを与えてくれると考えられる。

いま、人々の意識下にある「義理」がそのまま意識下に在りつづけるのか。「義理と贈答」を切り口に贈りもの文化を追究することで、人々の関係性のつなぎ役割をになう贈答が、病氣という生活・生命の危機的状況と日常性の橋渡しをする「病氣お見舞い」に焦点を当てていきたい。

[注]

- 1) 香川県小豆郡土庄町豊島(とのしょうちょう しま)。面積14.49k m²。岡山県宇野港・四国高松港から共にフェリー40分の瀬戸内海国立公園内にある島(離島振興法指定離島)。人口1232人、世帯数620、高齢化率42%(臈16)。島民の半数以上が公的年金のみの収入と生活補足的農・漁業で暮らしている。乳幼児福祉施設、精神・身体障害者福祉施設、特別養護老人施設の3施設が主に女性の就労先となっている。1975年～2000年の期間に、有害産業不法投棄事件が起こり日本で初めて行政との公害調停が成立した

経緯がある。

- 2) 井下 理, 1978 年, 「贈りものとお礼の第一次調査」(留置き質問紙法、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県, の首都圏在住の主婦対象 448 名)。

量的調査として, 博報堂生活総合研究所の生活調査の「病気お見舞い」に関する項を参考資料としてあげる。「この半年間にした贈り物」生活調査。調査地域;首都 40Km 圏、阪神 30Km。調査対象;20~69 才の男女。サンプル数 2000 人。首都圏 1381 人, 阪神圏 619 人調査方法;訪問留め置き自記入法期間 2000/5/10~30。 <http://www.athill.com>

- 3) 飛鳥時代遣隋使小野妹子が帰朝のさい、隋国より朝廷への贈り物に紅白に染め分けられた麻の紐状のものが掛けてあった。帰路の平穏祈願と贈り物が真摯なものである事の表現とされその後朝廷への貢物はこれに習った。一般化したのは平安時代に紙で元結を造ることによる。印刷された金封や熨斗紙は戦時中に商品化した。
- 4) 「12 月朔日 天気よし。……内祝ひ十五軒へくばる。」『小梅日記』第 3 巻 p 128
- 5) 秋田県田沢湖町部落「病気見舞いお返し廃止」 www.ashita.or.jp/case/group/f97/03.htm
- 6) 2005 年, 本稿で行った豊島と奈良市で実施した実態調査の奈良市 I さんの 79 件の病気お見舞いを受けた事例。
- 7) 水戸家正史は「ご病氣と承り, 使者をもってお見舞い申しあげます」とお見舞いの品を送り, 井伊家の家老が「ありがたき仕合せに存じます」と受けた www.hagakurecafe.jp

[文献]

伊藤幹治, 1995, 『贈与交換の人類学』筑摩書房。

井下理, 1979, 「贈答行動にみる日本人の人間関係についての一考察—贈り物とお礼の第一次調査資料より」『年報社会心理学』第 20 号, p 29~49。

井上忠司, 1977, 『世間体の構造』日本放送出版会

加藤秀俊編, 2003, 『コメとアジアのひとびと』中部高等学術研究所。

川合小梅, 幕末~明治『小梅日記』1~3 巻 1994 初版 7 刷発刊 校訂者志賀裕 春村田静子 東洋文庫 285 平凡社。

川島武宜, 1951, 「義理」『思想』9 岩波書店, p 21-28。

川島武宜, 1950, 『日本社会の家族的構成』日本評論社。

国土庁地方振興局離島振興課監修 日本離島センター編集, 『離島統計年報』日本離島センター 昭和 50 年版。56 年版。60 年版。平成 9 年版。12 年版。

豊島部落連合会, 『豊島村史』昭和 54 年複製。

源了圓, 1969, 『義理と人情—日本の心情の一考察』中央公論新社。

三島由紀夫, 1977, 『葉隠入門』新潮文庫。

モース・マルセル, 1950, 『社会学と人類学 I』有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳, 弘文堂。

(かみかわ よしえ 人間文化研究科博士後期課程)

Visiting the Sick and the Japanese Sense of Obligation: A Comparison between Remote Island Teshima and Nara-shi in the Exchange of Gifts

KAMIKAWA Yoshie

Abstract

When visiting the sick, there is a custom of giving a gift and a custom of receiving “a return gift” in celebration of the recovery from the illness. What kind of role does this sense of obligation have in the exchange of gift, and how does this custom differ from area to area? The reasons for the differences will be investigated.

In the first chapter, the following theory is investigated: A gift given in return for a gift received is the characteristic custom in Japan based on a sense of obligation.

In the second chapter, this custom is analyzed using Teshima and Nara-shi during a six-month period in 2003. The frequency of visiting the sick in Teshima was three times that of Nara-shi. This action of visiting and giving and returning gifts is classified in 3 categories: a display your true feelings, a sense of obligation, and a mix of both (true feeling and obligation).

This action of visiting the sick varies depending on the amount of obligation the two parties feel toward each other. This sense of obligation is influenced by how much tradition the local society maintains.

Nowadays, the Japanese sense of obligation is affected by the changes brought about by modern society, creating a new Japanese sense of obligation. Therefore, the form of sick visitation is changing as well.

(keywords: a return gift, Japanese sense of obligation, a new Japanese sense of obligation)